

だいず不耕起栽培技術と作付け体系への導入法

だいず不耕起栽培は収量、品質が慣行と同等であるが、播種前の施肥や耕起、中耕・培土作業の省略により省力化が図られる。栽培上ポイントとなる排水対策は、額縁明渠に加えて播種溝に交差した弾丸暗渠施工が必須であり、雑草対策は播種前茎葉処理剤と播種後土壌処理剤を組み合わせた体系処理が効果的である。

だいず不耕起栽培の技術内容

『排水対策』

深さ 30cm 以上の額縁明渠施工に加えて播種溝と交差する方向の弾丸暗渠施工が必須である。

弾丸暗渠の代替として前年秋耕も有効であるが、播種までに地耐力の回復が不能な圃場(重粘質土壌等)での実施は避ける。



弾丸暗渠施工の様子

『播種前・除草剤散布』

非選択性茎葉処理除草剤を散布する。

除草効果を高めるため、特に使用時期を守る。

『播種・施肥』

不耕起播種機により播種、同時施肥(側条)を行う。

播種量、施肥量は慣行に準じて行うが、狭畦・密植とする場合の播種量は慣行の 1.5 ~ 2 倍とし、倒伏軽減のため適期内の晩播とする。



不耕起播種の様子

『播種後・除草剤散布』

慣行に準じて土壌処理除草剤を散布する。

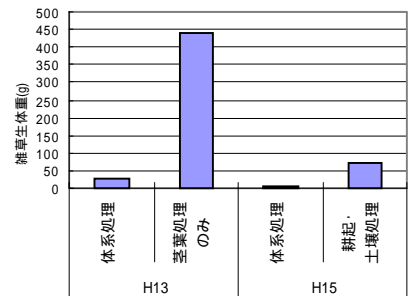
播種前・除草剤散布と組み合わせた体系処理により十分な除草効果が得られる。

『病虫害防除』(慣行に準じて行う)

冠水・滞水により茎疫病が発生した場合は、対象薬剤の追加散布が必要となる。

『収穫・乾燥・調整・出荷』(慣行に準じて行う)

中耕・培土を行わないため圃場が平坦で機械収穫しやすいことから、刈り残しが少なく、汚粒発生の危険性も低い。



除草剤体系処理による除草効果

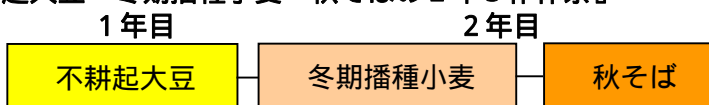
作付体系への導入法

『水稻 - 大豆の2年2作体系』



水稻とのブロックローテーションでは排水対策が特に重要となる。

『不耕起大豆 - 冬期播種小麦 - 秋そばの2年3作体系』



不耕起播種機は小麦、そばにも汎用利用できる。

どちらの作付け体系でも不耕起大豆の収量は 300kg/10a 以上(坪刈)可能である。

また、冬期播種小麦、そばでも標準収量が得られる。